

## 聖なる樹々（上）

——ラフカディオ・ハーン「青柳物語」と「十六桜」について——

牧 野 陽 子

### 一、樹霊の物語

ラフカディオ・ハーン（一八五〇—一九〇四）の晩年の再話作品集『怪談』（一九〇四）には、「雪女」「むじな」「耳なし芳一」などよく知られたもののほかに、全十五篇のうち樹木にまつわる話が三篇含まれている。柳の樹の精と結ばれた若者の「青柳物語」と、寒いうちに花をつける早咲きの桜樹の由来を語る「乳母桜」と「十六桜」の三作である。

ハーンは、日本の古い怪奇な物語や不思議な話の再話を『霊の日本』『影』『骨董』などに収めてきたが、特に構成に意を尽くした、遺作とも言える最後の作品集に至って、他の怪談話とはまったく読後感の異なる樹木の物語が入っている。ハーンはこれらの物語にどのような意味を認めたのだろうか。

日本についてのハーンの第一作である『知られぬ日本の面影』（二八九四）にふくまれる紀行文を読むと、日本

聖なる樹々（上）

聖なる樹々（上）

の自然風景の中でも特に樹々の風情に心をひかれた様子がそこにはうかがえる。

巨大な古樹に囲まれた寺や神社の境内、山上へと続く石段や山道に覆いかぶさるように鬱蒼と生い茂る杉や楓の林。そうした樹々がつくりだす、ほの暗い空間の厳かさや神聖さに、ハーンは「地藏」「盆踊り」「杵築」など初期の文章のなかで繰り返し触れていた。

また後年、東京の市ヶ谷に住んでいた頃には、隣の瘤寺の緑濃い墓地进行を朝夕散策するのを何よりの楽しみとし、その境内の樹木が伐り倒された時に悲しみ怒って、転居の一因となったというエピソードもよく知られている。

一八九〇年の春、来日直後のハーンは横浜近郊の神社仏閣をみてまわりながら、咲き誇る桜の美しさに感嘆して、こう記した。

「どうして日本では、樹木がこうも美しいのであろう。西洋では、梅や桜が花をつけても、目をみはらせる光景になるということがない。それが、この国では世にも不思議な美しさなので、どんなにあらかじめ本で読んでいる人も、実景に接すれば、思わず知らず息を呑む。葉は見えず、一面にうすものを延べたような花の霞である。この神々の国では、昔から木々もまた、人間になれ親しんでわが子のようにいとおしまれ、その果てに木々にさえ魂というものが宿るようになり、ちやうど愛された女のするように、自分をいつそう美しくすることによって、この国の人たちに感謝のこころを表そうとつとめているのだらうか。」（「東洋の土を踏んだ日」<sup>(1)</sup>）

ここで直接讃えられているのは、「ヨーロッパのどんな花も及ばないほど美しい」とB・H・チェンバレンでさえ評したという<sup>(2)</sup>、春の桜の幻想的な光景である。ただ、ハーンは、花として景色としての美しさに感心するだ

けではなく、日本という神々の国では樹々にさえ魂というものが宿っていると感じ、しかも樹木の優しい風情は人間と心が通いあっているからだにとらえて、そこに心動かされている。

出雲の松江に赴任すると、山陰各地で注連縄を巻いた老樹や御幣を飾った神木を見聞きして、そういう民間信仰や習俗に興味を抱いた。自宅とした武家屋敷の庭の四季を彩る花や樹々に纏わる伝説や迷信をもひとつひとつ書き留めており、「木に、少なくとも日本の木に魂があるということは、不自然な幻想などとは思えない。……ある意味で、人間の用に立つべく創造されたものという西洋古来の樹木観に比べて、はるかに宇宙の真理に近いという印象を与える」(「日本の庭で」<sup>(3)</sup>)と述べている。

ハーンが、虫や蛙など小さな生き物や草木の命を慈しみ、動物にも植物にも人間と同じ靈魂の存在を認めるアニミズム的世界観に共感を覚える人であったことは、重ねて指摘されてきたことである。ハーンには虫にまつわる物語や研究も多い。

たしかに、「青柳物語」などの樹霊の話を晩年のハーンが取り上げたのは、樹木に対する愛着や民俗学的関心、そして万物の背後に霊的なものを感じとる心性があつてのことではあろう。

だが、ハーンは他の怪談話の再話の場合と同じく、ここでも素材とした原話に手を加えている。ならば、ハーンは何をどのように変えた上で、『怪談』に収めたのか。「青柳物語」および「十六桜」とはいかなる物語なのか。そして日本にも、ギリシャ神話など西洋にも、連綿と伝わる樹霊のフォークロアをハーンはいかに自らの再話作品の中にとり入れ、かつ変容させたのか。

聖なる樹々（上）

二、「青柳物語」——樹靈のいざない

「青柳物語」(The Story of Aoyagi) は人間の男が柳の樹の精と結ばれる話である。

能登の大名に仕える友忠という名の若侍がいた。文武両道に秀でて主君の覚えめでたく、眉目秀麗で人柄もよかった。ある冬のこと、主君の密命を帯びて都に上ることになる。旅路に出たのは、一番寒い時期で、北国はすっかり雪に包まれていた。途中、山の中で、友忠は吹雪に襲われる。あたりに人家はなく、吹きつゝの風の中、馬も疲れきつてこれ以上進めそうにない。日が暮れ、不安にかられたその時、

思いもかけず、小さな家の藁葺きの屋根が目に入った。それは柳の樹々が生い立つ近くの丘の頂きにあつた。やつとのこと疲れた馬をその小家までせきたてて行き、この吹雪の夜すっかり閉ざされた雨戸を激しく叩いた。老婆が雨戸を開けてくれた。そして見知らぬ美貌の若者の様子を見て、いたわるように言った。「まあ、お気の毒な。こんな空模様の日<sup>(5)</sup>に若いお方が一人旅をなさろうとは。お待さま、さあ、どうぞ中へお入りくださいませ」

旅人が森の奥深く、道に迷い、途方に暮れる。宵闇の中、かなたに見える人家の灯り。民話や童話によく見られる、魔と出会う、不思議な物語の始まりを知らせる設定である。一面の雪が一層、非日常の舞台をつくりだしている。そして丘の上の柳の樹陰の家の中へ、「さあ、どうぞ」と招き入れる老婆の言葉はそのまま、物語空間

への誘いとなる。

この静かで民話的な導入部に続いて展開するのが、若いふたりの出会いと恋、結婚、そして別れまでの話である。

友忠は質素で奥床しい老夫婦に温かく迎え入れられ、一夜の宿を乞う。そしてその美しい娘を見初めた。娘は名を青柳といった。髪は長く波うち、粗末な身なりにもかかわらず、たおやかな美しさと優しさに友忠は心奪われる。娘の方も頬を赤らめ、ふたりは和歌をやりとりして、互いの気持ちを確かめあう。友忠は結婚を申し入れた。老夫婦は喜びながらも、身分を考えて恐縮し、娘を託すことには同意する。翌朝、遠慮深い老夫婦は友忠がお札の金子を渡そうとしても、決して受け取らない。そして友忠が娘を大事にしてくれると信じている、という言葉とともに二人を送り出す。

都に出た友忠は、まだ結婚許可を主君から得ていないため、青柳を人目につかぬよう隠した。ところが、その美しさを聞き知った色好みの細川侯に、無理やり召し出されてしまう。細川侯は主君のさらに主筋にあたる有力な大名である。友忠は自分の非力を嘆き、危険を承知で青柳に密かに詩を綴って送った。翌日、大名に呼び出され死を覚悟して出向くと、大名は心打たれた面持ちで友忠の詩を詠じて、それほど想いあっているのなら、ここで婚礼を挙げるがよいと告げると、奥の間に通じる襖が左右にさっと開く。そこには、重臣たちが勢揃いした中に、花嫁姿の青柳が待っていた。そして、ふたりは皆々から祝福され、華やかに喜ばしく式が行われる。

ふたりの恋の展開と成就のいきさつの部分は、会話も多く、互いの気持ちが深まっていく様が描かれ、また老親や細川侯とのからみなどをへて、まるでオペラかバレエの大団円のように華やかに締め括られる。

聖なる樹々（上）

だが、幸せな五年が過ぎたある日、突然妻が苦しそうな声を発したと思うと、みるみるうちに弱っていく。驚き心配する夫に、妻は言う。

「ふたりが結ばれたのもきつと何か前世の因縁でしょう。この幸せな結びつきが、きつと来世でもふたりを一緒にさせてくれます。でもこの世の縁はこれでおしまいです。もうお別れなのです」。そして打ち明ける。「私は実は人間ではありません。樹の魂が私の魂、樹の心が私の心、柳の樹の樹液が私の命なのです。それなのに誰かが、いま無残にも、私の樹を伐り倒そうとしている。だから死なねばなりません……」。

いま一度苦痛の叫びを発すると、女は顔をそむけ、その美しい顔を袖の蔭に隠そうとした。だがほとんど同じ瞬間に女の体全体が奇妙に崩れて下へ下へと沈んでついに床まで沈んだ。……友忠が支えようにも妻の体はもうどこにもない。畳の上には美しい青柳のぬけ殻となった着物と髪にさしてあった飾りだけが落ちていた。

……

友忠は剃髪して仏門に帰依する。廻国の僧となって国中をあまねく行脚し、各地の霊場に詣でた。そして巡礼の途中、かつて青柳の家があったはずの場所をたずねあててが、いまは跡形もない。

そこには三本の柳の樹の切株——二本は老樹で一本はまだ若い柳の切株——があるのみだった。それは友忠がそこに着くはるか前に伐り倒されていたのである。

友忠はかたわらに墓を建てると、そこに経文を刻み、青柳とその父母のために手厚く仏事を営んだ。

「青柳物語」はしつとりとした情緒と優しさに包まれて終わる。他の怪異譚におけるような死者は登場せず、恐怖、裏切り、疑い、恨みなどかけらもなく、あるのは愛と善意、信頼と誠意である。登場する人々の気持ちには、若い二人の間は勿論のこと、友忠と老夫婦、そして友忠と細川公との間でも、みな必ず通いあう。別れと死も浄化され、ハーンの怪談の多くで悲劇の引き金となる「前世の因縁」でさえ、ここでは幸せな縁が来世でも繰り返される保証となる。友忠は剃髪して仏門に入るが、それは、たとえばハーンが再話した「おしどり」「因果話」「持田の百姓」などの結末のように主人公が罪業の深さを悔いてのことではない。友忠には何の過ちも悪因縁もなく、ひとえに菩提を弔うという形で愛を貫くためである。友忠と青柳が織りなすのは、あくまでも純粹で清らかな物語だといえる。

「青柳物語」の原話は、奇談を集めた浮世草子の『玉すだれ』（辻堂兆風作、元禄十七年（一七〇四年）刊）巻三にある「柳精靈妖」であることがわかっている。荒筋や状況設定は同じだが、ハーンの再話に比べて全体的に短く、一見小さくみえるようで実は重要な違いがいくつかある。

「文明の年中能登の国の大守畠山義統の家臣に岩木七郎友忠と云ふ者有り。幼少の比より才智世に勝れ、文章に名を得和漢の才に富たり。」と始まる「柳精靈妖」は、続いて、主君が細川氏に与して山名氏攻略のために越前の山中に出陣した経緯を具体的に述べて、不穏な戦乱の世に生きながらも詩文の才に長けた一人の若侍の姿をまず打ち出す。

聖なる樹々（上）

そしてその友忠が雪の中で娘の家をみつける場面は、

「雪千峰を埋み、寒風はだへを通し、馬なづみて進まず。路の旁らに茅舎の中に煙ふすぶりければ、友忠馬をうちよせてみるに、姥祖父十七八の娘を中に置き只三人、焼火に眠り居たり」となっている。ハーンの再話では「柳の樹々が生いたつ丘の上」に家があるのだが、ここでは、山の中の道ぞいに小家があるというだけで、それが実は道端の柳の樹だったことは結末にならないとわからない。

また、原話では娘に「青柳」という名前もついていない。友忠が見初めた娘は「花のまなじり麗しく、雪の肌清らかにやさしく媚びて」、「神仙の住まいかとあやしまる」ほどの美貌であるとは記されているが、最後に樹の精であることをみずから明かすまで、特にその気配はない。「柳精靈妖」という題名を別にすれば、原話では柳の樹への言及は最後にしかなく、全体的に樹木のイメージは希薄なのである。

むしろ原話の方で目立つのは、友忠と娘の相聞歌と、友忠が書き送った漢詩である。これらの詩歌が話を展開させる重要な役割を果たしている。すでに述べたように、まず冒頭で、友忠は「文章に名を得和漢の才に富たり」と、詩文の才がうたわれる。若いふたりは歌のやりとりで心が通じ、娘の間髪を入れぬ鮮やかな返歌ぶりに友忠は「只人にあらじ」と結婚を求める。そして、女を奪いとられて綴った切々たる漢詩の力が、時の権力者をも「これ汝の句なりや。誠に深く感心す」とその心を動かし、「則ち女を呼出し友忠に与え、剩さへ種々の引出物して返し給ふ」のは、「尤も文道の徳なりけり」という。

つまり、話の中で主眼がおかれているのは、詩文の力なのだといえよう。和歌によって二人がちぎり、ついで漢詩によって公的に認められるという経緯も、それぞれの文体が関わる世界を象徴しているようで面白いが、い



ずれにせよ、詩歌の力で神仙の存在とも、この世の権力者とも心が通じ合うのである。「柳精靈妖」は樹靈の話であり、仏教説話の面ももつ。しかし、話の核に流れるのは、詩歌には天地鬼神をも感動させる力があるとする、「古今集仮名序」以来の考え方だろう。そして友忠は戦国の世にありながら、そのような詩心をもった若侍として描かれている。

やはり江戸時代の怪異譚集である『伽婢子』（浅井了意編著、寛文六年（一六六六年）刊）は、『剪燈新話』など中国の怪奇物語を素材にしたものだが、その中に「早梅花妖精」という話がある。「柳精靈妖」の友忠と同じように戦乱の最中でも「敷島の道」を忘れぬという武士が、ある夕暮れ、満開の梅の花をたずねる。その芳しさに思わず歌を吟じると、匂いたつような美女があらわれて、いぶかしむ武士に「梅の香に誘われ、月にうそぶくこの夕暮れに、やさしき人にあひたてまつることこそうれしけれ」と微笑みかける。ふたりは和歌をやりとりし、酒を汲み交わし、心を通じ合わせる。ふと目覚めると夜明けであり、男は梅の樹のもとに伏していた。袂の残り香に、梅の花の精であつたことに気付くという話なのだが、興味深いのは、中国の原話（趙師雄醉憩梅花下云々）『龍城録』の方には詩歌のくだりがなく、浅井了意が再話に際して脚色し、漢詩と和歌を挿入したことである。<sup>(7)</sup>

また、例えば奥州に流布する「阿古耶の松」の伝説<sup>(8)</sup>でも、阿古耶姫のもとに毎夜、実は古松の精である美丈夫が現れてやがて結ばれるのは、姫が詩歌管弦に堪能<sup>ビレ</sup>であり、その琴の妙音に心魅かれたからだとされる。

あるいはこのような日本の樹靈にまつわる説話においては、精靈の存在自体は自明のことだからこそ、意が通じるその通じ方の方に光が当てられたのかもしれない。

だがハーンは、「柳精靈妖」における戦国の状況説明を簡略化し、友忠の詩文の才について、また文道の徳に

聖なる樹々（上）

ついでに語句を削除した。和歌も漢詩も英訳を添えて残してあるが、物語のひとつまとして流れの中に溶け込んでしまっている。かわりにハーンが大きく前面に浮き上がらせたのが、まずは青柳そのものの姿であり、ついで物語全体を支配する樹木の存在感である。

ハーンは青柳の描写を大きく膨らませた。友忠の前に、青柳があらためて姿を現す時、原話では「娘かたちを飾り衣裳をかへて帳をかかけ……美しさあやしきほどにぞ有りける」とあるだけだが、ハーンは、

娘が衝立の陰から出てきた。いつのまにか粗いがさっぱりした手織りの着物に着替えている。長くゆるやかな髪はきれいに櫛でとかしつけてあった。盃に酒をつぐために娘が前かがみになった時、友忠は今までに会ったどの女よりもはるかに美しいのに気付いて驚いた。その所作の一つ一つが優雅なのである。……応える言葉もその表情と同じように甘美であった。……話し方も身のこなし方も旧家の姫君の風情があった。

と描く。長くゆるやかに波うつ髪が魅力であり、質素な着物が優雅な身のこなしを引き立たせ、凜とした気品が漂う貴婦人のような美しさを印象づける。

さらに、青柳が身を明かす時も、原話の「みづからもと人間の種ならず柳樹の精」と手短かに言う所を、ハーンの青柳は、すでに記したごとく

“I am not a human being. The soul of a tree is my soul ; — the heart of a tree is my heart ; — the sap of the willow is my life.”（私は実は人間ではありません。樹の魂が私の魂、樹の心が私の心、柳の樹の樹液が私の命なのです。）

と、たたみかけるように語りだす。その言葉は、樹の魂から樹の心へ、そして柳の幹の中を流れる瑞々しい樹液へと、次第にリズムを強めながら自身と一体化させ、脈打つ命のイメージを巧みに具象化させていく。

そして最後に、青柳が苦痛の叫びをあげながら友忠の腕の中で、まるで大地に吸い込まれていくように下へ下へと沈んで消え入る場面もハーンの脚色であり、「雪女」のお雪が一条の白い霧と化して空へ舞い上がって消えていった最後のように、いかにもこの世のものならぬ柳の樹の妖精であることを彷彿とさせる。

このように青柳を描いたハーンの中では、どのようなイメージが重ねあわせられていたのだろうか。

ハーンは、東京大学で「西洋の詩歌における樹の精について」<sup>(9)</sup>という文学講義をおこない、西洋にはギリシヤ以来、美しい樹のニンフに神々や人間の男が恋心を抱いて織りなされる物語の伝統があることを語っている。

ハーンによれば、古代ギリシヤのカロン作と伝えられる「ロイコス物語」<sup>(10)</sup>はギリシヤ語の原文は失われているが、欧米の文学の中で繰り返し再話されてきた、樹の精と人間の一つの原型的な話だという。そして、その最もすぐれた再話作品の例として、十九世紀イギリスの詩人ウォルター・サヴェジ・ランドー (Walter Savage Landor, 1775-1864) の長編詩「樹の精」(Hamadryad) を詳しく紹介する。

その話の中では、ロイコスという名の若者が父親の命で森の中の樫の樹を切り倒しに行くところ、樫の樹の精が姿を現し、その美しさに心奪われた若者は、樹を伐採から救う。樹の精はお札に毎年多量の蜂蜜と蠟を若者の父親に与えることを申し出るのだが、若者は乙女の愛を求め、ふたりは愛しあうようになる。そして樹の精は、決して自分を裏切らないように、もしそんなことがあれば悲しい結末になるから、と告げる。だが、ある時、ふとしたことで若者は樹の精の心を踏みにじってしまう。樹の精のはるかな苦痛の叫びが聞こえた若者は驚いて森に駆け込む。すると樹は哀れな酷い姿で倒れていた。若者も絶望してそこでやがて息絶える。

ハーンは、こうした樹精神話は魅力的かつ普遍的なものであり、一千人の詩人が幾世紀にもわたって同じ話に

## 聖なる樹々（上）

靈感を得て様々に語り直したとしても、その新しさが失われることはない、と講義を締め括った。講義が行われた月日は定かでない、はたしてこの時、「青柳物語」の構想がすでにあったのかどうかはわからないが、晩年の文学講義と亡くなる半年前に刊行された『怪談』の執筆とはそう時期がはなれていることはあるまい。またハーンはすでに松江時代のエッセイ「日本の庭で」の中で、「青柳物語」の雛形ともいえるような、侍と庭の柳の精にまつわる京都の伝説に触れている。したがって、少なくとも「樹精の物語に靈感を得る一千人の詩人」の数の中には、自分自身をも含めていたにちがいない。<sup>(11)</sup>

前述したように、ハーンは素材に用いた日本の「柳精靈妖」を換骨脱胎して、話の力点を詩歌の効力から、人間と結ばれる樹の妖精そのものへと移した。そして、やはり人間の男と樹の精の物語である「ロイコス」の物語を原型とする西洋の樹霊の話の系譜にハーンの再話作品「青柳物語」をつらねてみると、そこで一番異なっているのは、人間と樹々の関係のありかたなのである。

ランダーの「樹の精」では、樹を材木として伐採しないかわりに蜜の収穫を得るという物質的な関係の要素が人間と樹木の間に前提としてある。その利害関係を乗り越えた所で、若者ロイコスと樹の精の愛は始まるのだが、最終的には「オンディヌ」や「人魚姫」の話と同様、男の不実によって悲劇に終わる。人間側の破約によって、人間ならぬ存在との関係が破綻するのは、たしかに、いわゆる異類婚姻譚に多くみられる結末である。しかし、「青柳物語」の中の友忠は最後まで青柳に忠実であり、青柳の死後も二人の絆を守り続ける。柳の老夫婦も友忠に青柳を託す時、決してお金を受けとらず、またロイコスに対して樹の精が発したような警告の言葉ではなく、信頼の言葉のみで送り出す。つまり前述したような、「青柳物語」の世界を彩る優しさと愛と信頼は、と

りもなおさずその物語における人間と樹々の精、ひいては人間と自然とのかかわり方を表しているのだといえるのかもしれない。

ハーンが来日当初、桜の樹々の美しさに感嘆して、その美しさは人間と樹々とが気持ちを通いあわせてきたことの賜物にちがいないと考えたこと、また、西洋の功利主義的な樹木観と対比させて日本の樹霊信仰に感銘を受けたことについては先に触れたが、樹霊と人間の結びつきを描いた晩年の「青柳物語」とは、あたかも日本の樹々から受けたその印象が物語化されて表現されたかのようでもある。

ただし、ここでハーンが、この親密で清らかな世界を直接は提示せず、そのままとしては語っていないことに注目すべきだろう。ハーンは、友忠と青柳の織りなす人間と樹霊の物語を、さらに大きな樹木の存在感で包み込んでいる。そしてこの点にこそ、ハーンの再話の創意がある。

ハーンが原話に加えた一番重要な変更は、物語冒頭における柳の老樹の描写である。

既に記したように原話では、「路の旁らに茅舎の中に煙ふすぶりければ、友忠馬をうちよせてみるに、姥祖父十七八の娘を中に……」と続き、柳の樹への言及はない。老婆が戸を開けて迎え入れる所もない。最後に、山の道ぞいに柳の樹があつたのだと切株でわかるだけである。ところがハーンは、先にも引用したように、こう記す。

“Tomotada unexpectedly perceived the thatched roof of a cottage on the summit of a near hill, where willow trees were growing.”（思ひもかけず、小さな家の藁葺きの屋根が目に入った。それは近くの丘の頂きにあり、そこには柳の樹々が生い立っていた。）

## 聖なる樹々（上）

友忠の視線は、茅葺きの屋根から丘の丸い頂きへ、そしてその頂きに立つ柳の樹々へと移っていく。かくして読者の脳裏には、丘の上に立つ樹木の映像が影絵のように刻みこまれるのである。

山道の脇に生える柳の樹が、北陸の山中で現実に見うけられる日常的な風景であるのに対して、丘の稜線の上にくっきりと浮かび上がる樹木のシルエットは、神話的な色彩を帯びている。そこには、天と地、神々と人間とを結ぶ、いわゆる世界樹、生命の樹の面影さえ漂う。そしてその神話的な樹木が、柳の老母の姿に化身し、旅の若武者に向かつて扉を開き、誘う。

ハーンの「青柳物語」の中心をなすのは、若者と柳の妖精の優しく清らかな恋物語なのだが、そのいわば夢の世界へ「さあ、どうぞ中へ」と招き入れるのは、丘の上に立つ柳の老樹に他ならない。老樹の精霊が、導入部分と結末の一步引いた調子の語りにはさまれた劇中劇のごとく、樹霊との婚姻の物語を提示する。樹木と人間の物語を、日本の原話にも、またハーンが意識しただろう西洋の「ロイコスの物語」の系譜にもない枠組み、つまりは二重の物語構造で囲うことによって成立させているのである。

そして、このような老樹の象徴的な存在が、物語全体を支配するがごとく冒頭にあるからこそ、最後に友忠が行脚の僧となるという結末も、より根源的な深みをもって昇華され、読む者の心に響いてくるのではないだろうか。

原話の「柳精霊妖」では、男は「天にこがれ地にふしてかなしめども、さりし面影は夢にだにみえず、せんかたなければ」出家し、実家の跡の柳の切株の傍に塚をつき「泣く泣く別れ去りけり」とある。このやや大仰な悲しみの記述をハーンは削除し、かわりに、「国中をあまねく行脚し、各地の霊場 Holy Places に詣り」と諸国巡

礼の旅の部分を膨らませ、原話にはない「青柳の」父母のために」も仏事を営んだという記述を付け加えた。ここに、友忠が最後に選択した生き方、諸国行脚の巡礼の旅は、もはや妻の弔いというレベルにはとどまらなくなっていく。

青柳の父母とは、物語冒頭に現れる丘の上の柳の老樹に他ならない。そして友忠は、そのような老樹、巨樹がうつそうと繁る山深き聖地を巡っていくのである。男はあたかも、冒頭の老樹の誘いに応えるがごとく、樹々の聖域に入っていく。男が受け止めたのは、青柳との絆であると同時に、聖なる樹木そのものの世界なのだといえよう。

「青柳物語」とはまさしく、夢の世界を提示した老樹のいざないと、そのいざないに応える男の物語なのではないか。

そして、その老樹との絆を別の角度から語るのが、『怪談』の中で「青柳物語」の次におかれた「十六桜」である。

〔注〕

(1) 仙北谷晃一訳「東洋の土を踏んだ日」『小泉八雲名作選集 神々の国の首都』、講談社学術文庫、三二頁

(2) 「日本の庭で」同右、二九五頁

(3) 同右、二九八頁

(4) 平川祐弘「御神木の倒れた日」『オリエンタルな夢―小泉八雲と霊の世界』、筑摩書房、一九九六、

仙北谷晃一「樹木との共苦共生」『人生の教師ラフカディオ・ハーン』、恒文社、一九九六、など

聖なる樹々（上）

聖なる樹々（上）

- (5) 平川祐弘訳「青柳物語」、「小泉八雲名作選集 怪談・奇談」、講談社学術文庫。ただし、部分的に語句を変えたところもある。

“The Story of Aoyagi”, *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 11, reproduced by Rinsen Book Co.

- (6) 「柳精靈妖」、「小泉八雲名作選集 怪談・奇談」巻末「原拠」、講談社学術文庫、三九二頁

- (7) 浅井了意『伽婢子・2』江本裕校訂、平凡社・東洋文庫、一〇三頁

- (8) 日野巖『植物怪異伝説新考』有明書房、昭和十三年、一九九頁

- (9) 『ラフカディオ・ハーン著作集 第七巻 文学の解釈Ⅱ』恒文社、一九八五年、二七三頁

- (10) 『ロイコスの物語』をあげたことについては、伝承文学論の古典とされる

Thomas Keightley, *The Fairy Mythology*, 1850 の中の記述 [『妖精の誕生』市場泰男訳、社会思想社、一九八二年、

二二三頁]に做ったのかもしれない。同書はヘルン文庫に含まれ、またハーンはすでに来日前、この本を読んで神話伝説の比較研究を興味深く思ったことを、友人のクレイビル宛一八八三年九月の手紙に記している。

- (11) 『ラフカディオ・ハーン著作集 第七巻』「解説」のなかで、池田雅之氏はハーンの「西洋の詩歌における樹の精について」にふれて、「青柳物語」は仏教の輪廻思想を借りる一方、ギリシャ神話の枠組みを想像力の源泉として指摘している。